をしへのしるべ 目次

平安結社趣書 …… 一頁
平安社社則 …… 三頁
教訓の趣旨 …… 五頁
五事略解 …… 八頁
家庭の修養 …… 十一頁
六行略解 …… 十三頁
諸詞例 …… 二十五頁
集會式例

以上

013890-000-6

特15-474

をしへのしるべ

滝沢 又市／編

M36

ABB-0115

平安結社告白書

人は一日も教訓なかるべからず、教訓なき人は禽獸に近し。既に教訓あれば一日も信仰なかるべからず、信仰なき人は木偶に近し。人、禽獸に近ければ社會は暗夜のごとく、人、木偶に近ければ社會は沙漠のごとし、然れども、教訓と信仰とは必しも二三宗派の專有にあらずして、二三宗派の外、まさに光明なる教訓と牢固なる信仰とあるなり。吾人は平々坦々たる大道の萬邦に通じ百世に亘りて不變不動なるを見る。百家異端、各、その條路ありといへども、歸する所、この大道に由らざるはなし。嗚呼、社會の人々は何が故にこの大道を知らずして暗夜に迷ひ沙漠に苦しむものかくのごとく多

きが、思ふに、かの、人を導くものが、故さらにその道を迂遠にし、故らにその教を神秘にし人をして大道を失はしむるものあるにあらざるなきを得むや。吾人は社會を離ることを能はず。故に、社會に對しては常に懇切寛恕の心を以て、互に相提携扶掖すべきものとす。今や、吾人は聖賢に則り、時勢に鑑み、教訓の趣旨を定め、これが修養と實行とをつゝしみ、同誓の友を天下に求め、相與に平和安慰の大道を廣めむことを期す。これ、みな、現世に對する衷誠の止むを得ざるに出づるなり。乃、こゝに、同衆結社してこれを標するに平安の二字を以てす。これ、實に、涓々たる源泉たり。而も潤澤四境に溢れ、遂に、沙漠をして沃土たらしめむ。これ、實に、微々たる爝火たり、而も、光輝兩間に滿ち、遂に、暗夜をして白晝たらしめむ。

同感の士女、請ふ來りてその事を與にせられよ。

平安社々則

第一　本社は、わが教訓の趣旨を賛同せるものを以て組織したる團體とす。

第二　本社は、わが教訓の趣旨を宣布し、これに伴へる種々の事業を經營するものとす。

第三　本社は、時々社員を會合し、又、圖書・雜誌を發行して諸般の指導をなすべし。

第四　本社は、東京に本部を置き、各地に支部を置く。

第五　本社々員は、本部又は支部に具ふる名簿に、その住所・職業・生

年月日を記入すべし。

第六　本社々員にあらずして本社の事業を補助するものは、これを準社員となす。

第七　本社の社費は、すべて、救濟寄附金によるものとす。

教訓の趣旨

人と生れたるものは、みな、上に向はむとする力を具ふ。上より上にのぼりて、已むことなきときは、こゝに、至上に至らむ。至上とは至大なり、至眞なり、至美なり、至樂なり、至善なり。至上なるものは、理想となりて人の心にやどり、實行となりて人の身にあらはる。理想は至上を明かならしむるものなり。故に、理想の光を保つものは、至上、われに明かにして、その活動、永く、窮なかるべし。されど、人、もし、妄想によりて理想の光を失ふときは、至上、われに暗きし

て、まさに、その活動を失はむとす。妄想とは、不思議を思ひ、神秘を信ずるもの、これなり。されば、人は、この妄想を除き、かの理想によりて、至上に至らむことをつとむべし。尊きものは、多しといへども、至上よりも尊きものはあらじ。故に、至上を明かにする理想、至上のあらはれたる實行、みな、ともに尊ぶべきものとす。古今聖賢の中、よくこの趣旨に合ふものは、ことに尊ぶべきものにして、われらの師となすところなり。われらは、この趣旨によりて、自己が身を立て、世の人を救はむことを誓ひ、修養と實行とに從事するものなり。修養とは、尊崇・講論・賛稱・祈禱・反省

の五事をつゝしむを云ふ。實行とは、心を錬り、身を修め、生産を營み、人を敬ひいつくしみ、世のために力をつくし、物ををしみもちふるの六行をつゝしむを云ふ。凡、この趣旨は、いかなる人も、みな、これを悟り、これを行ふべきものとす。人よくこの趣旨に從ひ、五事六行をつゝしみて怠らざるときは、その功德によりて、日々に至上に近づき、たとひ、病衰・貧苦・災難の中に陷るとも、その平和と安慰とを得むこと疑あるなし。

五事略解

尊崇とは、至上と理想とをたふとぶことなり。

尊崇の法二つあり、表敬（つゝしみ）と敬拜（をがみ）と、これなり。表敬とは起座ともに兩手の指を交叉し掌を内にして腹部又は股上に置き、頭をやゝ前方に傾け、眼をやゝ閉づるなり。敬拜とは、表敬の形をとり、そのまゝ體の上部をやゝ前方に傾くるなり。

講論とは、至上と理想とをときあかすなり。

一同敬拜をなし、講論者の外は表敬して、默聽し、最後に一同敬拜するなり。

贊稱とは、至上と理想との功德をたゝふるなり。

祈禱とは、理想によりて至上に至らむとする希望を發表するなり。

反省とは、至上と理想とに對して自己をかへりみるなり。

右、三ととも、單獨と共同との二種あり。單獨になすときは、先、敬拜し次に表敬して、その詞を默誦又は低聲に口誦し、了りて敬拜するなり。共同にてなすときは、一同敬拜し、詞を讀むもの丶外は表敬し、その詞を默聽し、了りて一同敬拜するなり。反省の場合には、詞を讀み了りて後、少時の間默念し、然る後に敬拜するなり。すべて、詞は「諸詞例」に由るべし。場合によりては、隨意に作るとも、又、聖賢の教訓を用ふとも、宜しきに從ふべし。

家庭の修養

一、朝起後、手を洗ひ口を嗽ぎ、直に單獨の祈禱をなすべし。

二、朝食の膳に向ひたるとき、家族共同の祈禱をなし、祈禱の後、長者に準じ會食すべし。

三、午食、晩食前、讀詞を省ける略式の共同祈禱をなし、（敬拜一回）をなし會食は朝

食のごとくなすべし。

四、就寢前、即、晩食と就寢との間に於て、家族共同の反省、祈禱をなすべし。

五、日曜若は、水曜の夕には、反省をなす前に、教訓の趣旨等を會讀し、講論をなすべし。

六、國の祝祭日には、朝食前祈禱と、もに、祝祭日の賛稱・祈禱をなすべし。家人の誕辰、又は紀念日、祖先の祭日、恩人の誕辰、又は、祭日等も、これに準ずるものとす。家々、これらの月日を詳記したる修養暦を具へむことを要す。

七、右、家族共同になし能はざる場合には獨單にこれをなすべし。

六行略解

心を錬るとは、知見を明かにして迷妄を離れ、感情を清らかにして汚濁を去り、意志を自由にして執着を脱することなり。

身を修むとは、身體をきたひ、健康を保ち、姿勢、容儀をとゝのへ、言語擧動をつゝしむことを云ふ。

生産を營むとは、職業を大切にし、時間を正しうし、勤勉怠ることなく、質素節儉にして、貯蓄をつとむることなり。

人を敬ひいつくしむとは、君に忠、親と祖先とに孝、夫婦相和し、兄弟を助け、兒孫を敎へ、緣族を親しみ、恩人を重んじ、朋友を信じ、僕婢をいたはり、公衆を愛し、遠人を慰むることを云ふ。

世の爲に力を盡すとは、法度に從ひ、義勇公に奉ずるはもとより、

公職をつとむる人を尊び助け、公共の恩人を、崇め、公用の物件を大切にし、祝祭日の儀式をつゝしみ、よき風俗を保たむが爲に、秩序を重んじ、禮儀をあつうし、勤儉をはげまし、時間を守り、男女の交際を正しうし、安寧をはからむが爲に、紛議を調停し、災害を豫防し、自治を全うせむが爲に、公選を行ひ公職を務むるに方りて、公平と懇切とを旨とし、才あるものは才を以て、富あるものは富を以て徳あるものは徳を以て、世の幸福善美を進むることなり。

物ををしみ用ふとは、生類を愛護し、萬物を利用することを云ふ。

諸詞例

朝起後祈禱詞

願くは、身と心とを新にし、五事六行をつゝしみて、尊き人となちむ。

食前祈禱詞

(一) 願はくは、己の務を全うし、身に過なく、慈愛を以て人に交はり、相ともに人生の生活をして、幸福善美ならしめむ。

(二) 願はくは、平和の心をたもち、正善の行をまもり、わが職分をつくし、人生の生活をして、幸福善美ならしむ、

(三) 願はくは、己が道をつゝしみ、人の過をゆるし、職業をはげみ、

報恩の務をつくし、人生の生活をして、幸福善美ならしめむ、

(四) 願はくは、己が身を正しうし、父母に事へ、兄弟を親しみ、親族の心を和らげ、相ともに人生の生活をして幸福善美ならしめむ。

(五) 願はくは、口に食事をなすがごとく身に善事を行ひ、昨日の業を顧みて、今日の務を全うし、人生の生活をして幸福善美ならしめむ。

反省詞

(一) われらは、こゝ反省を行ふ。氣を平かにし、心を明かにし、すこしも、僞なきことを誓ふ。

今日なしゝことは正しかりしか。今日なしゝことは過なかりしか。今日なすべき務をなさずして怠れることなきか。

われらは、自、省みて、正しきはよろこび、過てるはあらため、怠れるは戒め、益、進みて、尊き人とならむことを願ふ。

(二) われらは、こゝに反省を行ふ。氣を平かにし、心を明かにし、毫も、僞なきことを誓ふ。

われらは、理想の光を保ちて、至上を明かにせるか。われらは、妄想によりて、理想の光を失へることなきか。われらは、古今の聖賢を尊びて、これを師となせるか。われらは、よく、修養と、實行とをつゝしめるか。

われらは、自、省みて、正しきはよろこび、過てるはあらため、怠れるはいましめ、益、進みて、尊き人とならむことを願ふ。

(三) われらは、こゝに反省を行ふ。氣を平かにし、心を明かにし、す

こしも、僞なきことを誓ふ。

われらは、わが知見を明かにせるか、わが感情を清らかにせるか、わが意志を自由にせるか。今日の事、自、やましきところなきか。

われらは、自、省みて、正しきはよろこび、過てるはあらため、怠れるはいましめ、益、進みて、尊き人となることを願ふ。

就寢前祈禱詞

願はくは、身と心とを靜にし、やすらかにねむりて、しばしの休息をなさむ。

賛稱祈禱詞

（一月一日）　この朝、天皇陛下は四方拜の御式を行はせ給ふ。神々をうやまひ給ふみこゝろ四海にみち、皇室のみいづは益、高く、國民のさいはひは、益、大なり。われらは、この平和なる新年を迎へて、よろこび、かきりなきを覺ゆ。願はくは、相ともにすこやかにして命ながく、教訓の趣旨に從ひて、尊き人となり、力をつくして、榮えゆく君が代のすゝみを助け奉らむ。

（元始祭）　この日、天皇陛下は、賢所・皇靈殿・神殿の三所に於て、御親祭を行はせ給ふ。われらは、この日に逢ひて、皇位のはじめ、益、宏遠にして、國體のひかり、益、尊嚴なることを仰ぐ。願はくは、教訓の趣旨により、心を正しうし身をつゝしみ、忠良なる臣民となりて、天壤無窮の皇運を扶翼し奉らむ。

（孝明天皇祭）　この日、天皇陛下は、皇靈殿に於て、御親祭を行はせ給ふ。孝明天皇は、今上天皇陛下の御父君にましまして、弘化四年、

御年十七にして、御位に即かせられ給ひき。かしこくも天皇は英明の質にあらせられ、天下の泰平、萬民の安堵を謀らせ給ひしかども、時、あたかも、内には、德川幕府の力衰へ、外には、世界萬國の迫り來るありて、世は、麻のごとく亂れむとせしかば、御心を惱ませられ給ひしこと限なかりき。かくて、時、いまだ至らず、慶應二年、御年三十七にして神去り給ひぬ。今や今上天皇陛下、御父君の御志をつぎ、泰平安堵の道を開かせ給ひ、われらは、樂みて、君が代の深きめぐみを受くること、誠に、無上の幸福と云ふべし。願はくは、われらは、益はげみて、教訓の趣旨を守り、事なきときは、身をつゝしみ、業をつとめ、以て、善良の民となり、事あるときは、義にいさみ、公に奉じ、以て、忠義の臣とならむ。

（紀元節）　紀元節は、神武天皇御即位の日を祝し奉るなり。謹んで惟みるに、天孫邇々藝尊、この國に降臨し給ひ、日向の高千穗にましましゝが、神武天皇に至り、都を中國に奠めむとて東征し給ふこと六年、大和の國に入らせられ、逆ふ者を伐ち、順ふ者を撫で、四方を平らげ給ひ、辛酉の年、畝火山の東南橿原の地をひらき、宮居を立て、こゝに、天皇の御位につき給へり。これより、わが　皇室のみいづは、益、高大となり、わが國の光は四海に及べり。われらは、この日に逢ひて、　皇祖皇宗が國を肇め給ひしことの宏遠にして、德を樹て給ひしことの深厚なることを思ひ、忠良の國民となり、皇國をして、益、盛大富强ならしめむことを祈る。

（春(秋)季皇靈祭）　この日、春(秋)季皇靈祭を行はせられ、皇靈殿及、

神殿に於て、御親祭を行はせ給ふ。われらも亦、この日を以て、祖先等の祭を行ふ。過去を思ひ、遠きを祭るは、その本を忘れざる孝道なり。われらは、この日に於て、わが祖先等が世に示されたる尊きことを、うけつき語り傳へて、その光を彌、益、明かならしめむことを祈る。

（神武天皇祭）　この日は、神武天皇の神去りましましし日にして、天皇陛下は皇靈殿に於て御親祭を行はせらる。天皇は、御性質明達にして都を中國に奠めさせ給ひ、皇運益、榮え給ひ、御年百二十七にして神去り給ひぬ。われらは、この日に逢ひて、天皇が世に示させ給ひたる、尊、きことゞもを語り傳へて、益、その御光を明かならしめことを祈る。

（神嘗祭）　この日、天皇陛下は、今年みのりたる穀物を伊勢の　皇太神宮に供へさせ給ひ、賢所に於て御親祭を行はせらる。始に反り本に報ゆるは人道の大なるものとす。願はくは、われらも、陛下の世に示させ給ふ尊き教訓に從ひて、おのが生産をはげみ、平安なる今日の生活は、即、祖先の賜なることを思ひ、以て、報本反始の道を盡さむ。

（天長節）　天長節は、今上天皇陛下の御誕辰を祝し奉る日なり。謹んで惟みるに、陛下は嘉永五年九月廿二日京都に御降誕せさせ給ひき。明治元年はじめて、この　御儀式を行はせ給ひしが、明治五年、暦の改正により、十一月三日を以て、この佳節と定めらる。陛下は、内外多事の時に御位に卽かせられ、日ならずして、王政復古の

大業を成し遂げ給ひ、臣民の幸福を進め給はむとて、内に憲法を定めさせ給ひ、世界の平和を謀り給はむとて、外に國威を示させ給へり。中興の御いさをしは、誠に、日月とその光を並べ、天地とその大さを同じうす。われらば、謹んで、聖壽の無疆を祝し、寶祚の長久を祈り奉る。

(新嘗祭) 今日は、今年、みのりたる穀物をいさをしありし神々に供へ奉らるゝ御式日にして、天皇陛下は神殿に於て御親祭を行はせ給ふ。われらも亦この日に於て、このよき穀物を得たる神々の大功を思ひ、報恩の心をはげまし、君が代の益、榮えて、國民の益、平安ならむことを祈る。

(家人誕辰) 今日は、何某ぬしの世に生れ出でたる日なり。われらは、このよき日にあひて、ぬしがすこやかにして命ながく、教訓の趣旨に從ひて、尊き人となり、その生活の幸福善美ならむことを祈る。〔家人の尊族にば、恩人誕辰のと同文を用ふ。〕

(恩人誕辰) わが恩人何某ぬしは、この日において、世に生れ出でたまへり。われらは、このよき日にあひて、ぬしがすこやかにしていのちながく、益、尊く榮え給はむことを祈る。

(恩人(祖先)忌辰) わか恩人たる何某ぬしはこの日において世を去り給ひぬ。われらは、この日において、ぬしが世に示し給ひたる尊きことをうけつき、語り傳へて、その光を彌、益、明かならしめむことを祈る。

(除夜) われらは、この夕を以て、この年を送る。すぎこしかたを顧

みれば、よくやしなひ(修養)をつゝしみ、よくをこなひ(實行)をつとめたりと思へど、及ばず、足らざることも多かりしなり。されど、今に至りて、これを悔ゆとも詮なし。たゞ、われらか、大なる罪なくし相ともにこゝに、この年を送ることを得るは、世の人の恩と、己が守れる教訓との賜なることを思ひ、その、功德の限なきことを感謝するのみ。願はくは、この教訓の永く行はれて、人世の益、幸福善美ならむことを。

集會式例

この式例は、家庭の修養を推し廣めて、同誓者多數の集會に用ふるものなり。その順序・心得、左のごとし。

一　着席

着席の節は、順序を亂さず、靜肅を旨とし、沈默を守るべし。適當なる進行曲を奏す。

二　敬拜

樂器などの合圖により、一同敬拜をなし、徐に着席す。着席後は心を平かにし、表敬してあるべし。

三　奏樂

前段の着席後、凡、十秒時に始むべし。その曲は、その場合に適當なるものを撰

む。奏樂とともに、唱歌をなすも可なり。

四　讀詞

詞を讀むものは、奏樂終りて後、凡、十秒時に、徐にその詞を讀むべし。時としては、讀詞に代ふるに、講話を以てするも可なり。

詞を讀むものは、宣誓式に於ては、宣誓者これを讀み、葬式・追遠式などに於ては、親近なるものこれを讀み、反省式、祈禱式、贊稱式などに於ては、便宜に讀む者を定むべし。いづれの場合にも代讀を妨げず。

五　奏樂

前段の事終り、凡、十秒時に始むべし。その他、前に同じ。

六　敬拜

前に同じ。但、着席・表敬するに及ばず。

七　退席

着席に準ず。

服裝は清らかなるべし。聖賢の肖像を飾り、字句を掲ぐるも可なり。葬式・祭式等に於ては、その人の紀傳・功績などを詞中に入るべし。社員の集會する時は、祈禱式を行ひて反省詞を讀むを可とす、特別の目的を以て集會するときは、相應の詞を用ふべし。すべて、形式は簡にして要を得むことを勉め、作法は嚴にして節に合するを主とすべく、常に、精神を第一として、外形を第二とすべし。

明治三十六年八月二十日印刷
明治三十六年八月廿三日發行
（實價金貳錢五厘
郵稅金貳錢）

編輯兼發行者　平安社
東京市本所區横網町一丁目十九番地

右代表者　瀧澤又市
東京市神田區表神保町二番地

印刷者　三島宇一郎
同所

印刷所　弘文堂
（電話本局二三一六番）

本社發行圖書

平安

毎月一回十五日發行○定價一部參錢郵税五厘
發行所東京市本所區横綱町一丁目十九番地平安社

これは、社則第三によりて發行する雜誌にして、四方に散在せる社員の精神的交通に便にせむことを專とし、傍、社外の人にも、わが敎訓の趣旨を知らしめ、有志者の賛同を得る媒介たらしめむことを期せり。社說・講論・修養・實行・家庭・社會・娯樂・應問・報告の諸欄あり。

至上につきて　一冊(施本)

これは、わが敎訓中にある至上につきて、哲學的の說明を試みたるものなり。

誘導につきて　一冊(全上)

これは、わが敎訓を宣布する手引として、種々の注意を書きたるものなり。